

〔研究会報告〕

バンサとウンマで語るイスラム教圏東南アジア近現代史の試み  
——国際シンポジウム「バンサとウンマ」より——

山本博之

東南アジアのイスラム教は、土着の慣習と混合した実践と、普遍的イスラムに連なろうとする動きとの交わりによってさまざまな様相を示している。そこでは、私たちがふつうイスラム教あるいはムスリムという言葉で想像するあり方から大きくかけ離れた事例をたくさん見つけることができる。しかし、それらの事例を紹介するだけでは、単に「イスラム版・世界びっくり大集合」にしかならない。これに対し、このシンポジウムでは当事者たちの「言葉」に注目した。当事者が自分たちをどのように表現しようとしているかを見ることで、既存の制度からの逃避ではなく、自分たちを制度の中に位置づけようとする人々の営みを読み解こうと試みた。

まず、このシンポジウムでバンサとウンマという「言葉」に焦点を当てたことの意味を整理しておきたい。話を半島部マレーシア（以下、マラヤ）に限り、マレー人、華人、インド人の3つの区分を基礎とする社会制度が形成されたことを例にとる。マラヤでは、政治、経済、宗教、文化など、ほとんどの分野でこの3つの区分が重要である社会制度が形作られた。ただし、他方でこの制度にうまく乗らない人々も存在する。これらの人々は、制度を逆手にとって利用したり、制度から逃げ出したりする。

「マレー人はイスラム教徒、華人は非イスラム教徒、そのため両者の通婚はきわめてまれ」という言い方がある。とても大雑把に言えば、これは正しい。少なくともマラヤの多くの人々がそう認識しており、マラヤの「常識」だと言える。その一方で、少数ではあるが、この図式に当てはまらない人々もいる。このような現実をどう扱うべきなのか。

まず、全体の構造の把握を重視して、少数の事例を例外扱いする立場がありうる。上述の「.....通婚はきわめてまれ」で書き起こし、その延長上で論を進めるあり方がそれにあたる。政治学や経済学をはじめ、この立場をとる研究は少なくない。

これと逆に、「常識」の反例を挙げることで多様な現実を示そうとする立場がありうる。例えば、イスラム教から他宗教に改宗したマレー人を紹介すればマラヤの「常識」は崩れ、建前上の制度や認識と無関係に暮らす人々の「現実」が示されることになる。この立場での研究は、特に文化人類学に多いような印象がある。

このシンポジウムでは、この2つの立場を踏まえつつ、「常識」にはまりきらない事例を紹介することで制度の虚構性を暴いたり現実の多様性を示したりする方向よりも、その「例外」の担い手たちがいかにして自分たちのあり方を言葉で説明しようとしているかに関心を向けた。制度から逃れるだけでなく、社会の主流派・多数派に受け入れ可能な論理の枠内で、しかも自分たちの主張が織り込まれている論理を考え出し、それを社会に向けて発信することで、自分たちを社会の中にうまく位置づけようとする試みである。

「現実社会の人々の実践は多様で、言葉で語られる制度は虚構に過ぎない」と考える立場に対しては、この立場は制度志向が強いという印象を与えるかもしれない。あるいは、「勝つにしろ負けるにしろ、相手に正面から挑んで自分の主張を貫こうとするべきだ」と考える立場に対しては、白黒をつけることなく自分たちの要求を漸進的に実現していこうとするあり方は、潔い態度でないとの印象を与えるかもしれない。しかし、白黒をはっきりつけず、関係者をなるべく多く取り込んだうえで自分たちの要求を実現させるという努力を積み重ねてきたのがマレーシア（マレーシア）社会の特徴の1つであり、この点に対する積極的な評価の延長上にこそマレーシア研究の意義が立ち現われるものと筆者は強く信じており、その意味でこのシンポジウムはたいへん意義深いものであった。

\*

2007年5月12日（上智大学会場）、13日（東京外国語大学 AA 研会場）、19日（京都大学会場）に国際シンポジウム「バンサとウンマ：東南アジア・イスラーム地域における人間集団分類概念の比較研究」が、およびそれに関連して同月20日に京都大学で国際ワークショップ「周縁におけるイスラームの形：インドシナのムスリム」が行われた。国際シンポジウムは4つ<sup>1</sup>、国際ワークショップは2つ<sup>2</sup>の研究プロジェクトによる共催であり、制度上は別々のものであるが、テーマにも参加者にも継続性があるため、ここでは両者を「シンポジウム」とまとめて報告することにする。

このシンポジウムは、共催する各研究プロジェクトの積極的な支援なしには決して実現しなかったし、報告者をはじめ司会者や一般参加者の討論への積極的な参加があったからこそ有意義なものとなったということをはじめに強調しておき

---

<sup>1</sup> この国際シンポジウムは、(1)人間文化研究機構プログラム・イスラーム地域研究上智拠点（上智大学アジア文化研究所）・グループ2「東南アジア・イスラームの展開」、(2)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・共同研究プロジェクト「マレー世界の地方文化」、(3)京都大学地域研究統合情報センター共同研究ユニット「イスラーム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」、(4)ジャウィ文書研究会の共催で実施された。

<sup>2</sup> この国際ワークショップは、京都大学地域研究統合情報センター共同研究ユニット「イスラーム教圏東南アジアにおける社会秩序の構築と変容」が主催し、ジャウィ文書研究会の共催で実施された。

たい。その上で、このシンポジウムの内容面での基盤を提供したという点で、JAMS 関東地区の研究会・読書会がきわめて重要な役割を果たしたことも確認しておきたい。

2001年に西尾寛治を地区委員として立て直された JAMS 関東地区は、当初からこのシンポジウムのテーマとなった「バンサとウンマ」を読書会のテーマに掲げ、このシンポジウムの報告者であるアントニー・ミルナー、アリフィン・オマール、マイケル・ラファンの著作<sup>3</sup>を読書会で検討し、さらに関連する研究報告を行い、バンサとウンマについて討論を重ねてきた。このシンポジウムは、その主要メンバーが企画段階から関わり、さらにその多くが報告者として参加しており、JAMS 関東地区の5年間の研究成果のまとめと見ることもできる<sup>4</sup>。その意味で、このシンポジウムの成功は JAMS にとってもきわめて重要な意義を持つものとなった。

\*\*\*

シンポジウムは4日間にわたって行われた。1日目は、ジャウィ文書を用いた研究の最新の成果が披露され、また、若手研究者が事例報告を行い、バンサとウンマに関する研究のフロンティアを示した。2日目は、マレー世界の中核地域であるマラヤとスマトラ島北部を対象を絞り、マレー人概念やバンサ概念が歴史的にどのように展開したかが議論された。3日目は、ボルネオ北部、タイ南部、フィリピン南部の事例をもとに、2日目に検討されたバンサ・ムラユ概念などがマレー・インドネシア世界の周縁部にどのように移植されたか（あるいはされなかったか）が検討された。そして最終日である4日目は、マレー・インドネシア世界からさらに一步外に向かい、カンボジア、ベトナム、ラオスのムスリム・コミュニティにおけるバンサやウンマに関連する制度や実践が検討された。

このシンポジウムは、バンサとウンマに関する研究で国際的に知られるアントニー・ミルナー、アリフィン・オマール、マイケル・ラファンの3人を引き、日本からもこのテーマで研究を行ってきた研究者が参加し、さらにインドシナ諸国のムスリム研究者を招いたことで、このテーマで考えられる限りの豪華な顔ぶれとなった。前近代から現在に至る時期を対象とし、マレー・インドネシア世界を中心にしつつも東南アジアのほぼ全域にわたるムスリム社会の事例をカバーして、

---

<sup>3</sup> Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945-1950*. Oxford University Press., Milner, Anthony. 1994. *The invention of politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere*. Cambridge University Press., Laffan, Michael Francis. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma below the Winds*. Routledge Curzon.

<sup>4</sup> なお、2006年度より JAMS の運営体制と運営方針が一新され、関東地区は関西地区と同様に年間2回程度の例会を開催することとなったため、旧 JAMS 関東地区の主要メンバーは西尾寛治を代表とする日本マレー世界研究会 (JAAM) を立ち上げ、JAMS の連携研究会の1つとして活動を継続している。

4日間にわたって濃密な議論が重ねられた。従来の研究蓄積を整理し、問題の所在を共有したうえで、国際的にも通用する研究の最先端が切り拓かれたシンポジウムとなった。以下では、誌面の都合により、いくつかの報告に絞ってシンポジウム全体の流れを報告する。

\*

島嶼部東南アジアの多様な文化背景を持つ人々は、中東のムスリムによって「ジャウイの人々」と呼ばれ、その言葉は「ジャウイの言葉」と呼ばれた。ただし「ジャウイの人々」はさまざまな言語や慣習を持つ混成の人々であり、マイケル・ラファンはこれを「多種混成のジャウイ」という意味でジャウイ・エキュメネと呼んだ。ここでジャウイとは、中東においては東南アジアという地域性と結びついている点で「バンサ」と似た特徴を持ち、他方で東南アジアでは多様な人々をムスリム性によってひと括りにする点で「ウンマ」と似た特徴を持っていた。

これに対し、東南アジアでは支配層の家系であるムラユ（マレー人）をはじめとするさまざまな集合的アイデンティティが存在した。もっとも、支配層がすべてムラユだったわけではなく、西尾寛治が論じるように、社会的役割に応じてムラユやプギスなどの区別があった。後にインド系などの外来ムスリムの子孫が現地性を主張するためにジャウイと名乗り、他方で彼らの外来者性を強調する在地勢力のあいだでムラユ意識が広まり、強められていくことになる。

\*

植民地体制下のマラヤで現在の州に当たる領域概念が導入されると、州ごとに原住民としてのムラユ概念が発展した。この過程で、域外からの入植者はそれぞれジャワやミナンカバウなど出身地ごとにバンサとしてムラユの傘下に入ろうとした。坪井祐司が示したように、ここではバンサに相互扶助の枠組としての意味が与えられた。

ここでも外来者が人間集団分類概念の形成に重要な役割を担った。それは、第一に、外来者を現地社会にどのように位置づけるのか外来者側と受け入れ社会側のそれぞれが検討する必要が生じたためであり、第二に、その際に参考となる人間集団の分類概念のいくつかを外来者自身が外部世界から持ち込んだためである。外来者は自分たちを現地社会の一員として位置づけようとし、ときには外来の人間集団分類概念を用いて論理を立てる。しかし、受け入れ社会がその論理を受け入れるとは限らず、外来者の一部を取り込んだうえで「われわれ」を形作っていく。その意味で、華人、ジャワ人、アラブ人、西洋人、さらにそれらの人々と現地人のあいだの子たちが、この過程で重要な役割を担うことになる。このシンポジウムでは、篠崎香織が海峡植民地の華人の事例からこの問題を考察したほか、國谷徹がオランダ領地域における西洋人の認識を取り上げて論じた。

\*

独立・自治に向かう過程で、政党と選挙の導入により、多数決原理に基づく政治参加という考え方がもたらされ、マラヤではこれがバンサ概念と結びついた。バンサはもともと国境を越えるものとして想定されており、現実に国境を越えて広がっていることから、領域国家を相対化する契機とも成り得た。しかし、国民国家の時代になると、バンサは国境やその内部にある境界にしたがって閉じた枠組としての性格を強めることになった。

ここで重要な指摘は、人々を宗教でひと括りにしようとする態度に対し、有力な勢力に括り全体における主導権を奪われてしまう（したがって括り自体の地位が上がっても自分たちの地位は上がらない）と感じ、そのためその括りを細分化することを求める態度である。アリフィン・オマールによれば、1920年代、シンガポールのマレー人はアラブ人ムスリムやインド人ムスリムが植民地のムスリム住民の代表となることを嫌い、ムスリムとしてではなくマレー人として代表を立てることを求めた。また、筆者は、1950年代のサバで、ムスリム住民はマレー人が植民地におけるムスリム住民の代表となることを嫌い、その結果としてムスリム住民のあいだでバジャウ人意識などが生まれた事例を報告した。

これに対し、川島緑によれば、フィリピン南部では「バグンサ・イスラーム」という言葉が使われたという。ムスリム住民が「イスラーム」によって自分たちを括ろうとしたことは、1920年代のマレー人や1950年代のバジャウ人が「イスラム」や「マレー人」で括られることを嫌ってより小さい括りを求めた動きと対照的であり、とても興味深い事例である。

なお、筆者はバンサによる政治代表制のその後の展開として、1990年代にマラヤのマレー人政党と華人政党がサバに進出することで、サバのムスリム原住民と華人は、サバという枠組を通じるか、マラヤのマレー人バンサや華人バンサの枠組を利用するかの2つの経路を手に入れたと論じた。これと関連して西芳実は、2006年のアチェ統治法によってアチェで地元政党の結成が認められたことにより、アチェの人々は従来通り全国政党を通じるか、アチェの地元政党を通じるか、政治参加の2つの経路を手に入れたと論じた。

\*

4日目の議論は、1970年代以降の「イスラム教のグローバル化」の時代における「周縁」地域で見られるバンサとウンマの諸相とまとめられる。ここで「イスラム教のグローバル化」といったときに想定されているのは、イスラム諸国が他地域のムスリムに物質的な支援を与えるようになったことなどを含む。ウンマ（イスラム教に基づくつながり）は、原理的にはバンサや国家の枠を超えて広がりうる。しかし、東南アジアのムスリム社会では、かつてはウンマがバンサや国家を

越えて物質的な影響を与える枠組となることはあまりなく、せいぜい精神的な支援を与えるに過ぎなかった。しかし、近年ではムスリムであることにより外国のムスリム支援団体から支援を受ける機会が増えているという。このような状況のもと、大陸部東南アジアの非ムスリム国で国民国家における周縁に位置づけられ、バンサ（国民国家）の枠組を通じた相互扶助のシステムでは自分たちが国内で十分に代表されないと感じているムスリム・コミュニティは、イスラム・ネットワーク（すなわちウンマの枠組）を通じて外国のムスリムから庇護を受ける仕組が作られている。

この関係はバンサの枠を超えるものであり、ここに国民国家やバンサの相対化の契機を見出すことも可能だろう。ただし、4日目の各報告でも強調されていたように、このようなムスリム・ネットワークによって恩恵を受けているムスリムのあいだにも、他地域・他民族のムスリムと自分たちとは生活習慣が異なるとして線引きしようとする態度が見られるという。このように、バンサとは異なる枠組を利用しながらも、ムスリム・ネットワークの中に文化的アイデンティティが持ち込まれて境界線が引かれてしまう、いわばウンマの中にバンサの境界に沿って複数の区切りが作られる事態が生じている。単にムスリム・ネットワークを強調するだけでは不十分であり、ウンマ原理とバンサ原理がどう交わるかを見ることが必要であると言える。

\*\*\*

東南アジア・ムスリムによるさまざまな制度や実践は、他地域のムスリム社会を見慣れた目には、範型からの逸脱と映るかもしれない。しかし、現地の人々がどのような実践を行っており、さらにそれをどのように言葉で表現して世界のなかに自分たちを位置づけようとしているかを真摯に検討することこそが、東南アジアのムスリムがこれまで積み重ねてきた異質な要素との共存の努力を理解することに他ならない。この点では、他地域のイスラム／ムスリム研究者が東南アジアで比較研究を行うよりも前に、東南アジア地域を専門とする研究者がなすべきことがなお多くあるように思われる。

今回のシンポジウムで提起されたテーマは、単に過去の事実を確定するだけでなく、現在および将来の東南アジア地域のあり方を検討する上でもきわめて重要な枠組となりうるものである。今後、より多くの研究者の参加によってこのテーマに関する研究がさらに深まることを期待したい。